

## 巻 頭 言

今年、関西学院は創立 125 周年を迎え、大学図書館もまた、その前身、J.C.C. ニュートン先生によってつくられた書籍館から、同じ時間を歩んできた。その間にキャンパスが神戸原田の森から西宮上ヶ原に移り、それ以来、大学図書館は長く時計台の建物にあったため、それがこの冊子のタイトルにもなっている。

その後、施設の老朽化・狭隘化のため、1997 年に現在の大学図書館が開設されたが、それからでもすでに 17 年の年月が経った。

この 17 年間に、国内外の大学図書館は大きく変化してきた。その当初には、大学図書館は、学術研究のための貴重な図書・資料を収集し、研究に供することが最大の任務だったが、その後、情報化の波とともに書籍、雑誌の電子化が進み、図書館にもインターネットを介して多数の電子ジャーナル、電子書籍、データベースなどを提供するという新たな役割が加わった。

また、各大学の多キャンパス化によって、各周辺大学の図書館も分館や新館が建設された。本学でも、1995 年に神戸三田キャンパスの大学図書館分室（図書メディア館）を開館した。

だが、今また各大学の図書館は、これまでの学術研究中心の図書館から、学生たちが集い、そこにある書籍や電子ジャーナルを使い、長時間滞在して、授業とは別の形で自ら学び、それぞれが興味あることを探求し、問題解決する場へと変化しつつある。一人で静かに本を読みたい学生、グループで一緒に議論しながら研究成果をまとめようとする学生など、図書館に来る理由も様々であり、図書館はその多様な要望に応えなければならない。

世界的には、スタンフォード大学は多くの講義をインターネットで公開し、各国の大学、図書館、博物館、研究所にもインターネットでの授業・史料・資料公開を求めているが、これに欧米だけでなく、東アジアのトップといわれる大学や日本の代表的な大学が参加するようになってきている。シリアの 12 歳の少女が、世界各国の大学のデジタルライブラリーで資料を読んで博士学位をとっている。大学図書館、博物館はインターネットによって世界からの情報をスムーズに検索、閲覧できる環境を保障するグローバルな責務がある。また、学生の多様な要望に応えるために図書館員には、自らの情報サービス能力を高めていくことが求められている。

関西学院大学図書館は、小さくとも世界の大学図書館の改革の先駆けとなりたい。近い将来に大学図書館をリニューアルすべく、現在、館長、館員が一丸となって、関西学院らしい近未来の図書館のありようをもとめて、企画・計画を練り、全学に提案している。これからも、他にはない貴重な書籍、史料を収集・保管、世界に向けて発信し、関西学院の存在を世界に知らしめていくとともに、学生たちが自ら積極的に学ぶ場、共同で研究する場に、関西学院大学図書館を展開していきたい。

大学図書館長 奥野 卓司